

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19530588

研究課題名（和文） 高機能自閉症児における情動表出と情動理解の障害と発達

研究課題名（英文） Understanding of emotions and emotional expressions in children with high functional autism.

研究代表者

別府 哲（BEPPU SATOSHI）

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：20209208

研究成果の概要（和文）：

高機能自閉症児における社会性障害の基底にあると考えられる、情動表出や情動理解の障害について、以下のことを明らかにした。(1) 情動理解を意識的な情動処理と、無意識的な情動処理に分けた際に、自閉症児は、意識的な情動処理は高い言語能力の補償によって可能になるが、感情プライミングや表情の自動模倣にみられる無意識的な情動処理には障害を持ち続けること、よって無意識的な情動処理が一次障害と考えられることが示唆された。(2) 不安な情動のコントロールは、アタッチメント関係を形成することによって可能になる。自閉症児のアタッチメント関係形成を縦断的に検討した結果、自閉症児もアタッチメント関係形成は可能であること、しかしそれが定型発達児より高い言語能力によって成立し、その際アタッチメント対象を心理的安全基地ではなく道具的安全基地と把握するという障害による特異性も存在することが示された。(3) 就学前の高機能自閉症児における自己表情写真の情動理解を検討した結果、知的に遅れのない就学前の障害児はその理解が可能であったのに対し、高機能自閉症児は障害を示すことが明らかとなった。(4) 高機能自閉症児は小学生から中学生の時期にかけて、孤独感が増大し社会的コンピテンスが減少すること、定型発達児と比較すると、9、10歳の節で有意な差がみられるようになることが示された。

研究成果の概要（英文）：

This study suggested the impairment and development of emotional expression and understanding of emotion in children with high functional autism (HFA) as follows. (1) Examining the previous inconsistent researches of the understanding of emotions indicated that children with HFA could process the emotions consciously by compensating with high level of verbal abilities, but could not unconsciously. (2) Longitudinal study revealed that children with autism could regulate emotions by forming the secured relationship of an attachment figure. However, they could not form the psychological secure relationship of an attachment figure, but the instrumental secure relationship. (3) Handicapped children without autism could understand the facial emotion (anger, happy, sad) photographs of themselves, but children with HFA could not. (4) Children with HFA showed the stronger feeling of isolations and weaker competence of sociability than children with typical development in the childhood, and especially, the differences were significant in 4th ~ 6th grade of elementary school. That result indicated the relation between the feeling of isolation, the weak competence of sociability and secondary disabilities of children with HFA, e.g. school non-attendance, depression.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：発達障害・高機能自閉症

1. 研究開始当初の背景

通常学級に在籍する高機能自閉症児の中心的障害が社会性にあることが明らかとなり、その中でも一次的障害となるのは、言語で説明可能な命題的心理化ではなく、直観的心理化にある可能性が出されてきた。この直観的心理化は、情動理解・情動表出と密接に関連したものである。高機能自閉症児の情動理解・情動表出を明らかにすることは、この社会性の障害のメカニズムを明らかにする上で重要なものとなっている。

2. 研究の目的

1. で述べたように情動理解・情動表出についての解明が実践的に求められているにも関わらず、この領域ではまだ実証的研究が十分には蓄積されておらず、対立する知見が散見される。そこでここでは、先行研究を整理し高機能自閉症児の情動理解・情動表出に関する仮説を作ることと、それに基づいた実証的研究を行うことを目的とする。

3. 研究の方法

高機能自閉症児の情動理解・情動表出について、①近年増加している先行研究を整理し、矛盾した知見を一貫して説明しうる情動理解・情動表出に関する仮説を提出すること、②療育場面のビデオ分析により、特に不快や不安の情動を惹起するアタッチメント対象との分離場面を取り上げての、情動理解・表出の縦断的検討、③情動表出と情動理解の両方を必要とする自己表情写真の理解の検討、④周囲との情動理解・情動表出のずれは思春期以後、二次障害としての孤独感を増大させるといふ仮説の検証、の4点を検討した。

4. 研究成果

(1) 情動理解の一見矛盾した先行研究の結果の検討し、以下のような統一的に説明可能な仮説を提出した。それは、高機能自閉症児者は、意識的な情動理解(例えば、表情写真をじっくり見てその情動を判断する)は、言語能力が高くなるとその補償により可能になること、一方、無意識的な情動理解(例えば、闕下提示された表情写真がその後の無意味図形の好悪判断に影響を及ぼすという感情プライミング)は、補償できないため障害を示すというものである。無意識的な情動理解が一次的障害であり、それが直観的心理化の障害と関連していることを示唆した。

(2) アタッチメント対象との分離場面での情動表出とアタッチメント対象の情動理解を考える際には、まずアタッチメント関係形成そのものが可能であるかが課題となる。縦断的検討により、自閉症児もアタッチメント関係形成は可能であるが、その特異性も存在することが明らかにされた。一つは、定型発達児より、自閉症児の場合、アタッチメント関係形成を可能にするためにより高い言語発達能力を必要とするということである。二つは、定型発達児の場合、心理的安全基地としてアタッチメント対象を把握するのに対し、自閉症児は道具的安全基地として把握するという障害による特異性が示唆された。定型発達児は、自分が不安あるいは不快な場面にに対しアタッチメント対象が示す情動を理解し(例えば、不安な場面を、母親がにこやかにみつめていると、母親がその場面にポジティブな情動をいだいていることを理解する)、それによって心理的安全感をもつ。それに対し自閉症児は、不安な場面にアタッチメント対象が指示する内容によって、「いつもと同じ」という場面理解を得ることで安心

感を持つ。以上のことは、自閉症児も不安な場面で他者に不安な情動を表出し、それを受け止めてもらうことでその情動をコントロールすることは可能であるが、そのプロセスとメカニズムに特異性があることが示唆された。

(3) 就学前の高機能自閉症児と、それ以外の知的遅れのない障害児を対象に、1週間前に撮った自己表情写真(「嬉しい顔」「怒っている顔」「悲しい顔」)の情動理解を検討した。その結果、知的遅れのない障害児は、いずれの表情もチャンスレベルより高い正答率を示したが、高機能自閉症児は、「怒っている顔」以外はチャンスレベルより有意に高い正答率は示さなかった。これは、高機能自閉症児の情動表出と情動理解の一つの障害を示唆する結果と考えられた。

(4) 思春期前後の高機能自閉症児と定型発達児を対象に、孤独感と社会的コンピテンスを測定した。その結果、高機能自閉症児も定型発達児も、小学生から中学生にかけて孤独感は増大し社会的コンピテンスは減少するという発達経過をたどることが明らかとなった。しかし両群の差に着目すると、孤独感、小学校1～3年の時期には高機能自閉症児と定型発達児に有意な差がみられないのに対し、小学校4～6年以後は高機能自閉症児の方が有意に高くなること、社会的コンピテンスについては、小学校4～6年でのみ高機能自閉症児の方が定型発達児より有意に低いことが示された。これは、孤独感や社会的コンピテンスについて、9、10歳の節といわれる発達レベルとの関連を検討する必要性を示唆するものであった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 別府哲、特別支援教育に関する教育心理学的研究の動向と展望—自閉症児の感情に関する研究を中心に、教育心理学年報、査読有、48、2009、143-152.
- ② 野村香代・別府哲、高機能広汎性発達障害児は他者の行動の意図を予測する際に情動反応を伴うのか、小児の精神と神経、査読有、49(2)、2009、131-139.
- ③ 別府哲、発達障害の子どもの自己評価を育てる、アスペハート、査読無、8、2009、1-8.

④ 別府哲、子どもの内面をさぐる、季刊保育問題研究、査読無、233、2008、12-35.

⑤ 別府哲、学童期における高機能自閉症児の自他理解の発達と障害—高機能自閉症児及びアスペルガー症候群児の発達特徴をめぐる研究動向—、オープンリサーチセンター整備事業「臨床人間科学の構築：高機能自閉症児およびアスペルガー症候群児の学童期の発達特徴と教育的支援」(立命館大学人間科学研究所)、査読無、2008、3-22.

⑥ 別府哲、児童期から思春期へ—高機能自閉症児における「9、10歳の壁」と自他理解、アスペハート、査読無、17、2007、6-11.

[学会発表] (計6件)

① 別府哲、日本教育心理学会第50回大会・研究委員会企画シンポジウム「通常学級における特別支援教育—集団の中での子どもの育ちを考える」企画者・司会者、日本教育心理学会第50回総会論文集、2009、S6—S7.

② 別府哲、日本特殊教育学会第47回大会・自主シンポジウム53「発達障害のある子どもの対人関係支援法の探求(3)—自閉症と模倣—」企画者・指定討論者、日本特殊教育学会第47回大会発表論文集、2009、pp. 42-43.

③ 別府哲、日本特殊教育学会第46回大会・自主シンポジウム21「発達障害のある子どもの対人関係支援法の探求(2)—情動認知から支援へ—」企画者、日本特殊教育学会第46回大会発表論文集、2008、pp. 80.

④ 野村香代・別府哲、高機能広汎性発達障害児における自己有能感の発達、日本発達心理学会第19回大会発表論文集、2008、pp. 658.

⑤ 別府哲、日本発達心理学会第19回大会自主シンポジウム「自閉症支援における発達論的アプローチの展望—「社会性」の基盤としての自己・社会的認知・情動の発達支援」指定討論者、日本発達心理学会第19回大会発表論文集、2008、pp. 160-161.

⑥ 別府哲、日本特殊教育学会第45回大会自主シンポジウム9「発達障害のある子どもの対人関係支援法の探求(1)—自閉症の「情動」に関する研究の最前線—」企画者・指定討論者、日本特殊教育学会第45回大会発表論文集、2007、pp. 127.

〔図書〕(計2件)

- ①別府哲、自閉症児者の発達と生活―共感的自己肯定感を育むために、全国障害者問題研究会出版部、2009、全143頁.
- ②別府哲、障害を持つ子どもにおけるアタッチメント、数井みゆき・遠藤利彦(編著)「アタッチメントと臨床領域」ミネルヴァ書房、査読無、2007、59-78.

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

無し

6. 研究組織

(1) 研究代表者

別府 哲 (BEPPU SATOSHI)
岐阜大学・教育学部・教授
研究者番号：20209208

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し